

万葉集卷十六の「献新田部親王」歌「解釈の試み

——「蓮無し」と「髭無し」をめぐって——

月野文子

田部親王歌」の題詞をもつ三八三五番歌もそういった作品の一つである。

献新田部親王歌一首

勝間田之かつまたの池者我知いけはわれしる蓮無はぢすなし然言君之しかいふきみが鬚無如之ひげなきごとし（卷

十六・三八三五）

『万葉集』卷十六は、冒頭に「有縁并雑歌」の部立が記されており、由縁（成立事情）が伝えられている歌と宴席で作られた雑歌とを中心に編まれている。それらは、他の巻々の歌群に比べて詳しい題詞や左注を持ち、それによって成立時の事情はある程度は推測できる。とはいうものの、宴席歌群の中には左注によってもなお、如何なる意図で詠まれているのか想像できないような歌も少なくない。特に、即興歌や戯笑歌などの中には、その背景にあるもの（その場の人々の共通の認識）が読み取れないために、「笑い」の意味がはっきりしないものもまだ残されている。「献新

右或有人聞之曰、新田部親王出遊于堵裏御見勝間田之池感緒御心之中、還自彼池不忍怜愛、於時語婦人曰、今日遊行見勝田池、水影濤々、蓮花灼々、何怜断腸、不可得言、尔乃婦人作此戯歌專輒吟詠也

一首は直訳すれば「勝間田の池を私は知っています。あそこには蓮なんかありません。そう仰るあなたのお顔に鬚が

ないのと同じに」となる。歌はまず、勝間田の池の蓮の存在を、「我知る」の語を伴ってきっぱりと否定してしまう。さらに「蓮はぢ無し」という否定を相手に納得させるための比喩として、相手に鬚のないことを持ち出しているのである。左注の示す作歌事情に従えば、新田部親王が外出先で見た勝間田の池に咲く蓮の花の美しさを、帰邸後に当該歌の作者である婦人に語り、婦人はそれに答える代わりに、この歌を作って吟詠したというのである。なお、左注が「婦人」について一語も説明していないことからすれば、この婦人は新田部親王の妻妾のひとりと解釈してよいであろう。

さて、当該歌は卷十六の宴席歌群の中ほどに位置している。穂積親王の歌（三八一六）で始まるこの歌群は大まかに、吟誦歌、即興歌、嗤歌に分けて配列されている。当該歌は即興歌の中にあり、諧謔性を読み取るべきものとされてきたが、他の歌ほど笑いの意味が明瞭ではないため、古くから、論議の対象とされてきた。後で詳しく述べるように、戦後、漢詩文の掛詞の手法を用いて解釈する説が提出され、これによって一応の解決をみたといえるが、歌意の中心をなす「蓮無し」という否定の根拠として、何故「鬚無し」が持ち出されたのかという点には触れられることがなかったのである。

本稿は、当該歌の従来の解釈を整理しつつ、漢詩文の掛詞の手法を再吟味し、従来の説では不問にされてきた「蓮」と「鬚」の関係についていささかの私見を述べて、その場の人々の笑いの本質に少しでも迫ろうとするものである。

二

さて、一首を解釈するとき古くから問題とされてきたのは、実際に池に蓮はあったのかなかったのか、親王に鬚はあったのかなかったのか、という点であった。歌はその配列からみて、即興的な「笑い」を誘うものであったことは想像がつく。しかし、歌を字づらどおりに解釈したのでは、どこにも可笑しさを読み取ることはできない。そこで、親王が「池の蓮花は美しかった」といい、婦人が「あの池には蓮なんかありません」という、この食い違いに「戯笑」を読み取るうとしたのである。

十二世紀半ばに成立した『袋草紙』の記述に依れば、婦人が歌にこのように詠んでいるから親王には鬚がないものと人々は思っていたのに対して、三井寺の証観法師が新しい説を出して「如此歌ハ、彼親王以ノ外大髭也。是ハ汝ヲ無髭人ト如云也。勝間田ニハ無蓮、已虚言也ト読也（注）」と言ったという。つまり、勝間田の池には蓮など無いのに、それを有ると言うのは、親王には髭があるのに、髭など無いと

言うようなものだ、と解釈したのである。

仙覚(『万葉集註釈』)も同じように、「心ハ、新田部親王ハ、極メタル大鬚ニテオハシマシケルナリ。サテ此歌ハ、カツマタノ池ハワレシル蓮ナシ、シカイフキミカヒケナキカコトトハ、ウチチガヘテ読ルナリ」として、親王は大鬚であるのに婦人の歌はわざと事実と反対をいったものと見ている。ただし、この記述では、「ウチチガヘテ」は上の句の「はちすなし」にもかかっているとも取れ、後世、誤解を招くことになる。

契沖(『万葉代匠記』精撰本)は「…伝ノ意ニ依ルニ、彼池ニ蓮ハナカリケルヲ、蓮華灼々タリトノタマヘハ我ヨク彼池ノ蓮アルヘクシテナキ事ハ知参ラセテサフラフ。ナアサムカセタマヒソ然ノタマフ君ノ鬚オハシマスヘキ御顔ニ、ナキカ如クニテ候ト戯タルナリ。此親王ニハ鬚ノオハシマサムリケルナルヘシ。清輔袋草子ニ、三井寺勝観法師衆中ニシテ此歌ヲ釈シテ、聞カ如クナラハ此親王ハ大鬚ニテオハシマシケリト云ヘルヲ、満座感シケル由カムル。勝観カ云カ如クナラハ、勝間田ノ池ハケニモ蓮多ク侍ヘリ。然ノタマフ君ニ大鬚オハスル如クニ侍リト云ヘキヲ、戯テカヘサマニヨメリト意得タル歟。我知ト云ヲ能味ハムナナリ。」^(注3)としている。契沖自身の意見が前半であることははっきりしており、彼の結論は「此親王ニハ鬚ノオハシマサム

リケルナルヘシ」である。初稿本でも主張するところは殆ど同じである。ただ、契沖の言う「蓮アルヘクシテナキ事…君ノ鬚オハシマスヘキ御顔ニ、ナキカ如ク…」は、その池に蓮はあるべきなのに(有ったほうが良いのに)実際は無く、あなたさまの顔には鬚があるべきなのに(有ったほうが良いのに)無い、という意味に取らざるを得ないだろう。相手のプライドを傷つけかねない内容では好諧謔の歌として伝えられることはなかったと思われるが、契沖は同じ巻に見える身体的特徴をあざけり笑い合う「嗤歌」^(注4)と同じように捉えていたのだろうか。しかし、巻十六の嗤歌はいずれも題詞にそのことが明記されており、対等な立場での嘲り合いの歌、もしくは自分より身分の低い者をからかう歌に限られており、当該歌の題詞の「猷新田部親王」とは区別されるべきものである。

荷田春満(『万葉童蒙抄』)の説は「歌の意は注にて明也。水影濤々、蓮花灼々云々、此戯れの空言につきて、もと勝間田の池は水枯れて蓮は無く、水なき池を凡てかく宣ひしから、鬚多くありし王故、さ宣ふは君の鬚無きと被仰と同理と、戯れて申せし歌也。新田部王は鬚あつく生たる親王なりし故、如此詠めるならん」^(注5)である。ほぼ袋草紙の説を踏襲するが、「蓮無已虚言」という説をさらに強調して、勝間田の池自体が新田部親王の時代に既に枯れて存在しな

かったと言っている。

その後、橋千蔭（『万葉集略解』）が「：婦人の蓮なしと言えるは戯れにて、多く有を、返て無しと言ひて、さて此みこ鬚多きを、かへりて鬚無きが如しと言へる也」^{〔注6〕}とし、鹿持雅澄（『万葉集古義』）も「：勝間田の池は我よく案内を知りて侍るに蓮は一もともなし其は譬へば然詔ふ君が鬚の無きが如しと戯れ申せるにて信には蓮の多くあるを反りてかくいひ又鬚無と云るも彼親王きはめたる大鬚にておはしましけむを戯れにうちもどりてかく云るなり」^{〔注7〕}として、へ池には蓮が多くあり、親王は大髭であった」という説が定着することになる。近代の注釈書類もこれをそのまま受け継いだ解釈をしてきたのである。

みてきたように、従来の説では、婦人は親王の大鬚を笑うためにわざと事実と反対のことを言ったとされてきたのである。現実には多く存在するものを、ただ「ない」と否定することに即興的な機知を読み取ることができるとは思えないが、この説は昭和二十年代の後半まで支持される^{〔注8〕}。これらの旧説に対して小島憲之氏は、親王の言葉が漢文学の掛詞の手法の応用であることを見抜いて、

歌の左注に側近の婦人が登場して来るのはドウモ怪しい。しかも親王が水影濤々蓮花灼々たる池を見て後、

「不忍怜愛」 「何怜断腸不可得言」 などの表現は、表

記者の文学的アクセントと見ればそのまま済まされるが、それにしても何か恋愛的な表現に近い。つまり、遊仙窟に見る如く、「蓮」（陽平lian）に「恋」（去lian）——なほ「怜（憐）」lianもである——をかけた事が思ひ出される。蓮に美人をにははせた事は「頬中旱地生蓮」など二、三例もあり、蓮花灼々のうちに親王は婦人への戯れの恋を暗に述べたのではなからうか。^{〔注9〕}

として、婦人の歌を「me ha you yoク知ツテイマスガ、love（蓮）ナンテアリマセンヨ、you noヒゲガナイヤウニ（事実はその反対）」と口語訳したのである。

同じ頃、土屋文明の『万葉集私注』が、

思ふにワレシルは、婦人が己の自信を強調するための表現で、これを正面から取つて、婦人も池に蓮のないことを見て知っていたと、代匠記の様に解するのは、素朴すぎよう。つまりここでは、池に蓮の有無については問題として取り上げる必要はないので、婦人が強く否定して居ることだけが取り上げられればよいのである。：（略）：更に又考えれば、親王の池にて感じたものは、実はハチスではなく、そこに棲息して居た娘子などであり、親王はそれをかくしてハチスとして婦人に語つたので、婦人はその真相を感知し、此の歌

を作るに至つたのであらうといふことである。^{注10}

として、根拠こそ示さなかったものの、暗に女性の存在を匂わせるものであることを感じ取ったのである。

これらに続いて伊藤博氏も一首の表現の主体は上の句にある以上、上の句から戯れの所以を汲み取るべきであるとして、蓮には「怜」(恋)および「美人」がかけてあることを検証した。氏はまた、下の句における親王の「ひげ」の有無については、さして問題がないとしながらも、歌の表現の中心が「蓮なし」の否定にある以上、親王に実際「ひげ」がなかったことを、当意即妙にたとえたものと見ている。そして、歌の解釈を、

勝間田の池については私はちゃんと知っています。蓮なんてごさいません。それはちょうど、可憐可憐とおっしゃるあなたにおひげがないようなものです。へ可憐可憐とおっしゃるけれど、あなたは、お池に憐愛の情なんかいだいたのではありません。蓮は蓮でも、ちがうお方で作よう

とした。

この「蓮〓恋」の掛詞説の導入によって、何故親王が「蓮」のを持ち出したのかははっきりした。だが、問題の中心は親王の「ヒゲ」の有無から「ハス」の有無へ移り、鬚についてはさして問題とされなくなってしまふので

ある。

三

さて、万葉集の編纂者(もしくは原資料の筆録者)の興味は、親王の言葉と、それに応酬した婦人の歌との双方にある。親王の言葉自体が既に洒落たものであり、それに対する婦人の答えが当意即妙であるが故に、語りぐさとなって筆録当時まで伝えられていたのであろう。左注の中で新田部親王の言葉にあたる部分―仮に、これが表記者の文学的意識によるものであったにしても、表記者の親王の言葉に対する理解は「蓮と恋の掛詞」であったからこそ、このようなものになったことは確かである―は、「今日遊行」から「不可得言」までである。まず「水影濤々」で實際の池の広々とした様子をいい、続く「蓮花灼々」で、そこに咲く蓮花の美しさを表現する。むろん、小島・伊藤両氏が指摘しているように、「蓮の花」は美人の形容として用いられる語なのであるが、それを「灼々」と表現したところに既に親王のもくろみが顔を覗かせているように思われる。

灼々は花の美しさを形容する語であると同時に美人の形容としても、

粲粲妖容姿 灼灼美顔色 (擬「青青河畔草」陸機)

灼灼青軒女 冷冷高台中（「擬青青河畔草」鮑令暉）

の如くに常套的に使用される語である。だから蓮花を灼々の語で形容することによって、樂府の「採蓮曲」（船に棹さして蓮花をとる女性の艶姿を主題とする作品）などのように、そこに美人が存在することを連想させ、次句での内容の転換（景物↓恋情）をスムーズにすることに成功している。同時に「蓮」は「憐」の掛詞であることを相手に確実に気付かせるための伏線としていのである。（冒頭で引用した西本願寺本の左注では「憐」を「怜」に作るが、箋注本『切韻』に「憐 愛、俗作怜」^{注12}とあり、意味は同じで、強く惹かれる、愛情を感じる意である。）

さらに、「何怜断腸」と、「断腸」の語を用いることによってそれが恋情表現であることを決定的にするというものである。「断腸」は悲しみの極限状態を表わすのに用いられる語であるが、胸が熱く、痛くなるような強い感動を表わす場合にも用いられている。賛嘆の辞として使われる場合、その対象は美しい風景、音楽、女性などであるが、

「代淮南王」

鮑照

淮南王 好長生

服食練氣誦仙經

瑠璃藥盃牙作盤

金鼎玉七合神丹

合神丹 戲紫房

紫房彩女弄明璫

鸞歌鳳舞断君腸

「贈李司空妓」 劉禹錫

高髻雲鬢宮樣妝 春風一曲杜韋娘

司空見慣渾間事 断尽蘇州刺史腸

のように美しい女性に対する恋情表現に用いることが意外に多いのである。そして、その場合には「可憐」と共に用いられることも少なくない。

なお、親王の言葉の末尾にあたる「不可得言」は、諸注「イフコトヲウベカラズ」と読んで、蓮に譬えられる女性の美しさを「えも言われぬ」と表現したものと解釈しているようであるが、そうではなく、その女性が濤濤とした池の水の向こうにいたので憐情を抱いたけれど「言（ことば・約束）」を交わすことができなかった、の意に取るべきかもしれない。

親王の当初の意図は、婦人が掛詞を解するか否か試すことにあつたのではないだろう。おそらく、宴席の座興の謡い物の如くゆっくりとした調子で朗々と節をつけて歌ったのであろう。たとえば同じ巻の宴席歌の中にみえる、

穗積親王御歌一首

家尔有之 櫃尔鏢刺 蔵而之 恋乃奴之 束見懸而

（三八一六）

右歌一首穗積親王宴飲之日、酒酣之時好誦斯歌、以為恒賞也

のようなものであったろう。左注には、穂積親王が宴席で好んでこの歌を誦したとある。恋歌的な内容ではあるが、つねの賞（あじわいたのしむこと）としたとあるから、告白のための相聞歌でないことは明白である。これに続いて記載される四首も同様のもので、左注にそれぞれ「右歌二首河村王宴居之時、彈琴而即先誦此歌以為常行也」（三八一七・三八一八の左注）、「右歌二首小鯛王宴居之日、取琴登時必先吟詠此歌也」（三八一九・三八二〇の左注）とあって、いずれも宴席のお得意の誦詠であったことが記されている。これらは当該歌との間に宴席の物の名を読み込む即興歌を挟んで配列されており、何か分類上の関連があることは想像がつく。また、歌の後半で色っぽい落ちがついている点も当該歌左注の新田部親王の言葉と共通している。

ともあれ、この時代に前掲のような歌謡が上流階級で流行っていたものと思われる。左注の新田部親王の言葉（とくに水影濤々以下の四句、おそらく吟嘯）は、かかるものの漢文学版なのであり、内容が恋にかかわるものであったので、傍らにいた婦人の方を向いて謡ったにすぎないのだろう。新田部親王の声に耳を傾けていた人々は誰もが、最初は池のことだと思い、第二句で「おや？」そして第三句まで至ったときには、その意味を確信し、その場は大いに

響動めいただろう。拍手喝采を受けるのは親王の筈であった。ところがその時に、親王が予期だにしていなかった、婦人のしっぺがえしの歌の吟詠があり、さらに座は盛り上がったということなのであろう。

さて、小島・伊藤両氏の〈蓮と恋〉の掛詞説が提示されたことによって、問題は全て解決したかのように見え、その後、誰もこの歌を問題にしてはいない。むろん、この歌の解釈に漢詩文の掛詞の手法を取り込むべきことは、もはや異論のないところであろう。但し、大和言葉である「ハチス」と「恋」とが本当にその場にいた人々の頭の中でダイレクトに結びついたとすれば、その橋渡しとして「文選読み」のようなものを想定しておかなければならないだろう。当時、文選読みのかたちで人々に愛誦されていた漢文学作品が既に多く存在していたことになる。既に指摘されている『遊仙窟』などはその代表的なものであったのだろう。

「蓮」と「憐」の問題を筆者なりにもう少し考えてみよう。婦人の歌の表記は「蓮無」となっているが、歌の第三句めであるから「はちすなし」と五音節で読むことに間違いはない。「はちす」は本来、花の散ったあとの種子ができる部分の形状が蜂の巣に似ているところからきた呼び名である。『爾雅』の積草に

荷、芙蓉、其莖茄、其葉蓮、其本密、其華菡萏、其実蓮、其根藕、其中的、的中意

とある。『爾雅』は我国の上代人によく利用された書物のひとつであるが、後の『倭名類聚』が、『爾雅』のこの記述に基づいて芙蓉の各部位を説明しているのは示唆的である。たとえば、十卷本系統の天文本の卷十には

蓮 同云実子曰蓮、荷実其中葯蓮実也、郭璞云蓮謂房也葯蓮中子也

とある。又、同書は果蓏類の部においても「蓮子」の項目を立てて、それが「波知須乃美 荷実」であることを説明しているのである。十卷本系の他本も二十卷本系の本も、ほぼ同じ記述である。さらに、我国で当時使用されていた韻書『切韻』の中にも同様の説明をしたものがみられる。唐の中宗の神龍二年（七〇六）に成った『刊謬補缺切韻』の「蓮」字の項にも「路賢反、芙蓉実」とある。つまり、当時は「ハスの実」は漢字で表記すれば「蓮」、大和言葉ではこれを形状から「はちす」と呼んでいたことになる。すると、婦人の歌の「勝間田の池は我知る蓮なし」の「はちす」も当然、ハスの実を指していると考えてよいことになるだろう。

一応、万葉集中のハスの用例を確認しておく、当該歌の他にハスに関わる表現をした歌は三首ある。

○御佩乎 劍池之 蓮葉尔 淳有水之 往方無

我為時尔：（卷十三・三二八九）

○蓮葉者 加是許曾有物 意吉麻呂之

家在物者 宇毛乃葉尔有之（卷十六・三八二六）

○久堅之 雨毛落奴可 蓮荷尔

淳在水乃 玉似有将見（卷十六・三八三七）

三二八九番歌は相聞の長歌であるが、ハスの葉を「蓮葉」と表記している。三八二六番歌と三八二七番歌は当該歌と同じ巻の宴席の即興歌である。三八二六番歌には「詠荷葉歌」の題詞があり、三八三七番歌の左注には、「……於是饌食盛之皆用荷葉、諸人酒酣歌舞駱駝、乃誘兵衛云関其荷葉而作歌者、登時応声作斯歌也」とある。三八三七番歌の表記が「蓮荷」となっているのは、「荷」が『玉台新詠』の詩などでハスの葉を指す語として用いられていることによるのであろう。いずれにしても、万葉集はハスの「葉」であることを意識的に書き分けていたように、**「蓮」**一字の表記は当該歌以外には用いていない。

また、『日本後紀』延暦十二年八月条にも「翫蓮葉宴飲、奏樂賜禄」とあるし、古事記の歌謡にも美人をハスの花に譬えたものが一例あって、「草香江の入江のはちす花ばちす身の盛り人ともしきろかも」（雄略記）と、ハスの花を「はなばちす」としているのである。やはり、ただ

「はちす」という場合には、通常は、その種子が入っている部分（蜂の巣状の部分）を指していると考えた方がよいのだろう。

すると、親王は「蓮花灼々」と言うのに対して、婦人は蓮花の存在を一方的に否定したのではなく、「花は盛りで美しいかもしれませんが」未だハチス（実）はありませんわ」と言ったことになる。親王の言葉も婦人の歌もどちらも事実ととってよかったのである。親王の「蓮花灼々」が美人への恋情を仄めかした漢文学の表現であるならば、それに応じる婦人の歌も同じく漢文学の表現を踏まえたものでなければならぬ。

では、〈蓮の実〉は漢文学ではどのような使われ方をするのであろうか。蓮の掛詞を用いて恋情を謡った作品は「子夜歌」の中に多く見いだすことができる。その中に、ハスの実をうたったものがある。

遣_レ信_レ歎_レ不_レ来 自_レ往_レ復_レ不_レ出

金銅作_二芙蓉_一 蓮子何能_レ実

黄金や銅で飾りものの芙蓉を作ったところで、どう

してこれに蓮子（実）を結びさせることができようか。

↓恋が実らない

寢食不_レ相忘_一 同坐復俱起

玉藕金芙蓉 無_レ称_二我蓮子_一

玉石や黄金で作った芙蓉では、蓮子（実）を得ようと願ってもかなう（称）ことはない↓思いがかなわない

右の二首は晋の時代の清商曲辞の「子夜歌」であるが、続く宋の時代にも類似の表現が見られる。『爾雅』や『切韻』の記述からすれば、「蓮」の一字だけでもハスの実を表わすことになるが、ここで挙げた例は、「憐思（恋思）」と掛詞にするために「蓮子」としているのである。また、『遊仙窟』の中にも、「芙蓉生_二於澗底_一、蓮子実深、木栖出_二於山頭_一、相思日遠」の表現があった。すると、次にあげる『玉台新詠』巻十の近代呉歌九首の二つ「夏歌」なども同様の意に解釈すべきであろう。

鬱蒸仲暑月 長嘯出_二湖辺_一

芙蓉始結_レ蕊 抱_レ豔未_レ成_レ蓮

漢字では、芙蓉の実である「蓮」が「憐」に通じ、恋が実を結ぶことの象徴として用いられていたのである。

以上のことを考え合わせると、婦人は池にはへはちす（蓮子）↓憐思_{（ハチス）}がない、つまり、池の辺の恋が実らないと言っていることになるのである。

四

ところで、婦人が親王の漢詩文の掛詞を理解して応酬し

たと解釈する小島氏と伊藤氏の説は、全く同じというわけではない。小島説は、事実は歌とは反対で、〈蓮も鬚もある〉としているようであり、伊藤説は、否定を実証するために持ち出されているのであるから、〈新田部親王には実際に鬚がなかった〉と見るべきとしている。

従來說〈池にハスは多くあり、親王は大ヒゲだった〉は、親王が見たという「蓮花」と婦人が無いという「蓮」が同一のものを指していると取ったために、その矛盾を解決するためには、どちらかが事実と反することを言っているのみなければならず、〈婦人の方がわざとウラを言った〉ものとした結果、導き出されたものであった。したがって、「蓮花」と「蓮」とが同一のものでないことが解れば、〈婦人がわざとウラを言った〉とみる必要はなくなり、ハスもヒゲも多く存在したとする従來說は成り立たないことになるのである。

しかし、ほんとうに親王に鬚がなかったのであれば、親王にはない他のもの、たとえば〈尻尾〉でも〈角〉でもよかったわけで、なぜ、「鬚」という発想が出てきたのか、その蓋然性が説明されなければならないだろう。そこに存在しないものを即座に発想するきっかけとなったのは何か。鬚のないことがよほど珍しいことでないかぎり、この発想はできないだろう。鬚のないことが珍しいことだとすれば、

「鬚なし」という言葉は相手のプライドを傷つけるだけで、けっしてその場で明るく笑い誘うことはできないはずである。

ともかく、伊藤説、小島説のいずれを取るにしても、「蓮」と「ヒゲ」の関わりは説明されなければならない。「蓮なし」を否定する根拠が何故「鬚なし」でなければならなかったのか。実際の蓮の有無だけでは問題を解決できなかったように、ヒゲについても、そこに何か言語遊戯的な意味を見いだすべきなのだろう。

さて、ひとつ注意しなければならぬのは、左注が「婦人この歌を作りて、専輒吟詠す」としていることである。『私注』もこの語に着目しており、専輒の語は「専命、専断の意に用ゐる語と言はれるから、モハラでもその意はあらうが、もつと強調さるべきで、オモフガママニ、ホシキマニマニ、ホシイマママニ、とでも訓み、そこを明らかにせしむべきであらう。つまりこれは、親王の蓮を見たと言はれるに従はずに、ハチスナシと、我儘に一方的にきめて吟詠して居たといふ意味で、用ゐられた文字と見える。」としている。

婦人の言葉（歌）は、あくまでも声に出して吟詠されたものであったということである。したがって、「蓮なし」を否定する根拠となる「ヒゲなし」は、大和言葉で「ヒゲ」

と発音されたものであるが、それを表記するにあたって、どのような文字（漢字）がいちばんその場に相応しかったか、一度考え直してみる必要があるだろう。つまり、へ漢字の発音をを利用して掛詞の手法を意識している筈の当該歌に関しては、現存の表記のみに拘りすぎると、本来の意味を見落とす恐れがあるということである。

まず、『万葉集』諸本における当該歌のヒゲの表記を確認しておこう。

○鬚（西本願寺本・京大本）

○鬚（尼崎本・類聚古集・細井本・神宮文庫本・大矢本・紀州本など）

○髪（陽明文庫本）

万葉集の現存の伝本にもこのように異伝がある。ヒゲを表す漢字は右の他にも鬚、髻、鬣、鬚など数多くあることは言うまでもない。この歌のように「ひげ」という訓みが古くから確定していながら、表記に複数の異伝が生じてしまうということは、そこに使用されていた文字が筆写する段階の人々にとってはあまり馴染みのある漢字ではなかったであろうことは想像に難くない。又、『袋草紙』は、歌の引用部分は仮名書きであるが、説明文ではすべて「髭」の字を使用している。或は清輔の見た万葉集の表記は「髭」であったのかもしれない。とすれば、前掲の現存伝本中の

いずれかが本来の文字を選択し得ているとは限らないのではないか。

虚心に、「蓮」が「憐」の常套的な掛詞であることがその場のテーマであったことを考えれば、「蓮」の否定のために提示された「ヒゲ」は、「蓮」もしくは「恋」と直接の関わりを持つものでなければならず、しかも、婦人が満座の称賛を得るためには、婦人が親王の掛詞の意味を理解したことを、その場の人々に知らせるものでなければならぬ。音読みの「レン」ではなく、「ハチスなし」という歌言葉の吟詠が、同時に恋心の否定ともなることが、当事者の親王にはもちろん、周囲に居る人々にも理解されたということとは、蓮^二恋のイメージはかなり密接だったことになる。やはり、この掛詞を用いた文学表現が、「蓮のハチスは……」と文選読みで愛唱されていたとすべきだろう。このことも考慮しつつ、蓮（恋）の否定の根拠が「ヒゲ」でなければならなかった理由を探る必要がある。

さて、再び歌の表現に戻って考えてみよう。「蓮なし、然言う君が、ヒゲなきごとし」は、蓮（恋が実を結ぶこと）の象徴がないことを言おうとして、その比喩としてヒゲがないことを言っているのであった。つまり、「あなたにヒゲがない」ということが可憐断腸の恋心を抱くことの否定になっただけであるから、裏を返せば、ヒゲがあるこ

とが、その魅力的な女性を射止める条件だということになりはすまいか。

ここで確認しておかなければならないのは、親王の恋情は誰に向けられたものであるか、また、婦人はいかなる立場でこの歌を詠じたか、ということである。先述の小島説では、親王の恋愛感情は歌の作者である婦人に向けられているとしており、そのために婦人は「本当かしらね」というからかいの意味をこめて「蓮（恋）無し」と言ったことになる。親王の〈恋情〉がことばの向けられた相手である婦人に対するものとみるのは自然であろう。歌の論理からしても、恋の告白に答える者は、告白された当事者の婦人であるべきである。しかし、親王の言は「池のハス↓美人↓恋情」なのであるから、親王の恋愛感情（現実かどうかは別として）の対象は、伊藤説のように、勝間田の池の辺りにいた美人でなければならぬのである。婦人が蓮花（美人）の存在をそのまま否定したのであれば、親王の浮気心に拗ねて見せたことと取ることができ辻褄は合うが、そうではなく、婦人は「実」がないと言っているのである。また、そのきっぱりとした言い方はむしろ、恋の当事者が相手の誠実さを否定しているかのように思えてならない。

親王が恋心を抱いたのは池の辺りの美人に対してであるのに、親王の告白の言葉は婦人に向けられている。これを

矛盾なく解決するには、〈婦人＝池の辺りの美人〉と考える他ないだろう。つまり、宴席における恋歌の多くがそうであるように、この婦人は第三者としてではなく、恋の当事者として答えているのである。そもそも親王は言葉遊びの架空の恋をうたっていたのであった。すれば、婦人が池の辺りの女性の立場で歌を返したと想定することに何ら問題は無いだろう。当事者であればこそ、相手の気持ちを否定する（信用しない・拒否する）ことが許されるのである。ともかく、親王と婦人のやりとりは宴席の座興であり、明るい笑いを誘う内容であったはずである。新田部親王は勝間田の池の辺りで美人を見初めて恋心を抱いたことを仄めかすが、婦人（池の辺りの女性）によって「ヒゲがないでしょ」ときっぱりと否定されてしまうのである。身分尊い男が通りすがりに美人を見初める、男は言い寄るがきっぱりと拒否されるというストーリーがそこには読み取れる。ここで想起されるのは、楽府の『陌上桑』である。

日出^ニ東南ノ隈^ニ、照^{ラス}我ガ秦氏ノ楼^ヲ、秦氏^ニ有^ル好女^ニ、
自^ラ名^{ツケテ}為^ス羅敷^ト、羅敷善^ク蚕桑^ヲ、採^ル桑^ヲ城ノ南隈^ニ、
青系^ヲ為^ス籠系^ト、桂枝^ヲ為^ス籠鉤^ト、頭上^ニ倭墮鬢^ヲ、耳中^ニ
明月^ノ珠^ヲ、緗綺^ヲ為^シ下裙^ト、紫綺^ヲ為^ス上襦^ト、行^ク者^ハ見^テ
羅敷^ヲ、下^レ擔^ヲ、埵^ニ髭鬚^ヲ、少年^ハ見^テ羅敷^ヲ、脱^{シテ}帽^ヲ著^ク
幘頭^ヲ、耕^ス者^ハ忘^レ其^ノ犁^ヲ、鋤^ク者^ハ忘^ル其^ノ鋤^ヲ、来^リ婦^リ

相怨怒^{スルハ}、但^ダ坐^ス觀^ル、羅敷^一、使君從^レ南來^リ、五馬立^ロ。
 踟躕^ス、使君遺^メ吏^ヲ往^カ、問^フ是誰^ガ家^ノ姝^ト、秦氏有^リ。
 好女^一、自^ラ名^ツケテ、為^ス羅敷^ト。羅敷年幾何^ト、二十^ニ尚^ル不^レ。
 足^ラ、十五^ノ頗^ル有^レ余[、]使君謝^ス羅敷^ニ、寧^ロ可^キ共^ニ載^ス。
 不^{ヤト}、羅敷前^ニ致^ス詞^ヲ、使君一^ニ何^ソ愚^{ナル}、使君自^ラ有^レ。
 婦、羅敷自^ラ有^レ夫、東方^ノ千余^ノ騎、夫婿^ノ居^ル上^ノ頭^ニ、何^ヲ。
 用^テ識^ル夫婿^ヲ、白馬從^レ驪駒^一、青糸繫^ケ馬尾^ニ、黃金絡^ニ。
 馬頭^ニ、腰中^ノ鹿盧^ノ劍、可^レ值^ス千萬^余、十五^ノ府^ノ小^史、
 二十^ニ朝^テ大夫、三十^ニ侍^テ中郎、四十^ニ專^ニ。
 城^ラ居^ル、為^レ人^ト潔^ク白^皙、鬚鬚^ト頗^ル有^レ鬚[、]盈^盈。
 府^ニ步^ミ、冉冉^ト府^中趨^ル、坐^中數^千人、皆言^フ夫婿^殊。
 ナリト。

桑摘みの美女が権力者の求婚を拒否し、夫の自慢をして惚
 気る物語で、問答もユーモラスに展開している。後代にこ
 れを下敷きにした作品が多くつくられているが、この作品
 自体も長い間、多くの人々に愛誦され続けた。奈良時代の
 人々に愛好されたといわれる『玉台新詠』にも収められて
 いる作品でもある。

陌（あぜみち）の傍らに桑摘みの美女がいる。その名は
 羅敷。通行人は荷物を下ろして羅敷の美しさに見惚れる。
 彼女の気を引こうとして自慢の髭を捻って体裁をつける者
 もあるが、彼女は引っこうに振り向いてもくれない。行列

を止めて言い寄ろうとする大守に対しても、羅敷は自分の
 夫の自慢を長々と述べて拒絶するのである。「あなたにも
 奥様がおありのはず。わたしにも夫があります。」で始ま
 る羅敷のセリフには夫の勇ましい姿の自慢が長々と続くが、
 その最後のくだりに、「鬚鬚として頗る鬚有り」とあるの
 である。

そもそも、新田部親王が言おうとしたのは、「蓮」の音
 に掛けた「恋」であった。とすれば、婦人が其の「恋」を
 否定するものもやはり、「レン」の音を持つものでなけれ
 ばならない。そのレンの音をもつのが、当時、愛唱されて
 いたと思われる『陌上桑』の「鬚」のヒゲなのである。通
 りすがりの浮気心な親王は「灼々たる蓮花が憐を生む」と
 いうが、言い寄られた美女にとっては「鬚鬚たる鬚」が憐
 を生むものなのである。したがって、当該歌の口語訳は

あなたは池の蓮花の美しさに憐を抱いたと言うけれど、
 私は勝間田の池を見て知っていますよ。まだ蓮などあ
 りません。レンレンと言うあなたに鬚鬚のヒゲがない
 ようにね。（だからその恋は実りませんわ）
 となる。

なお、この文字の発音を確認しておく、『切韻』には
 鬚は「勒兼の切」とあり、「勒（le）」の声母である
 「l」プラス「兼（jian）」の韻母である「ian」

を合わせた発音、つまり「蓮」や「憐」「恋」と同じ発音の「lian」が導きだされるのである。

〔注〕

①『袋草紙』藤原清輔の歌学書。但し、当該歌は「勝間田の池はわれみるはちすなしかくいふ君がひげなきがごと」とされている。貞享二年に板本が出されたため、後の万葉集の注釈書に影響を与えたようである。引用は岩波書店の新大系本による。

②『万葉集註釈』文永六年（一二六九）に成る。引用は『万葉集叢書』所収のものによる。

③『万葉代匠記』精撰本は元禄三年（一六九〇）。初稿本は貞享四年（一六八七）。引用は岩波書店『契沖全集』による。

④一例をあげる。

池田朝臣嗤二大神朝臣奥守一歌一首

寺々の女餓鬼申さく大神の男餓鬼たばりて其の子生まはむ（三八四〇）

大神朝臣奥守報嗤歌一首

仏造る真朱足らずは水たまる池田の朝臣が鼻の上掘れ（三八四一）

⑤『万葉童蒙抄』享保十年（一七二五）頃。引用は吉川弘文館『荷田全集』による。

⑥『万葉集略解』寛政八年（一七九六）。引用は博文館刊行のものによる。

⑦『万葉集古義』天保十年（一八三九）。引用は図書刊行会（吉川判七）のものによる。

⑧たとえば武田祐吉の『万葉集全註釈』なども、〈蓮は多くあり親王は大鬚であった〉としている。

⑨小島憲之氏「万葉人の庖厨に漢籍あり」（国語国文二二七号 昭

和二八年七月）

⑩『万葉集私注』昭和二四年から三一年にかけて刊行。卷十六は三十年六月に発行されているが、原稿がいつ頃から準備されていたかは不明である。

⑪伊藤博氏「はちす―戯笑歌の一解釈―」（『萬葉』第三八号 昭和三六年一月）

⑫箋注本『切韻』唐の高宗の儀鳳二年（六七七）、長孫訥言によって成る。完本は現存しない。引用は、周祖謨『唐五代韻書集存』所収の残卷によった。

⑬『刊謬補缺切韻』唐の中宗の時代、王仁昫によって成る。引用は周祖謨の前掲書所収の故宮博物院藏本の影印によった。

⑭たとえば、『玉台新詠』卷七の「蓮舟買レ荷度」詩に「…荷披衣可レ識…当レ看荷葉開」、同書卷十の「青陽歌曲」詩にも「青荷蓋…緑水…芙蓉発…紅鮮…」とある。